

## 「努力賞」の親バカ

読売新聞(1月7日)の茨城版の記事を転載します。先週の映画の紹介につき、今週は新聞の切り抜きで、面目ないというか、いつまでお屠蘇気分がつづいてるのかとつっこまれそうですが…。

さて、この記事で紹介されているフリーペーパー「月刊北条」とやらないては、正月に本人が持参したので知ってはいました。

そして、元編集者としての目から見て、その紙面の出来に、辛い点数をつけておきました。やれ写真がよくないとか、やれ読む気を引かない紙面だとか。

でも親としては、まあ少なくとも頑張りや褒めてもやってもいいかな。

また、どうせなら生まれ育った街の活性化だろうとか、自分の家の稲刈りでも手伝わんかい!とかは言わないでおきますか。



終戦時の思い出などを話す宮本さん(左)と鈴木さん

# 商店街担う人々 筑波大生が紹介

筑波大の学生が、筑波山麓の北条商店街(つくば市北条)の人々を紹介するフリーペーパー「月刊北条」を発行している。地域の魅力を再発見し、衰退する商店街の活性化に一役買おうという狙いから、住民らにも好評だ。

### フリペ「月刊北条」

### 取材なども戦争体験

月刊北条は、筑波大芸術専門学群のアートデザインプロデュース演習の授業の一環として、学生5人で取り組んでいる。北条商店街の店主らを紹介しながら、若者の視点で商店街の魅力を伝えている。10月に創刊し、以後、毎月、A4判4頁ほどにまとめ、約500部を地域の人たちに軒下

軒を回って配布している。発行の過程では学生が、それまで知らなかった世界に触れて感銘を受けたという「出会い」もある。

最新号の12月号で、同学群2年の鈴木平人さん(19)は、1960年代までしょ

している。文字通り本土決戦の秋が来た。手紙にはそんな言葉がつけられ、緊迫感を伝えていた。

鈴木さんは「教科書を通してしか知らなかった戦争

だが、直筆の手紙を見て、一人の人間に結びついたものとして実感できた」と感想を話す。一方、宮本さん

は、「当時の自分たちの気持ちや、現代の若者が察して、書いてくれたことほどうれしい」と話す。

北条街づくり振興会の坂入英幸会長(58)は「商店街の活動だけでなく、地域の話題や魅力を若い人たちの視点で発信してくれて、近くにいっても知らなかったことを教えられる。地域おこしのPRにもつながるはずだ」と感銘を話す。

月刊北条は、ホームページ(http://www.hojjo-fureaikan.jp/) P15K9 1A5K9K9K9